

本間久雄のワイルド研究——明治時代——

佐々木隆

プロローグ

本間久雄(1886-1981)はオスカー・ワイルド(Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde, 1854-1900)を始め、ウォルター・ペイター(Walter Pater, 1839-1894)、エレン・ケイ(Ellen Kay, 1849-1926)、ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)、ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)などを研究してきた。明治・大正・昭和の三代に渡って生き、日本のワイルド研究を支えた本間のワイルド研究を時期的に見ると、早稲田時代とそれ以降に分かれる。早稲田時代は「早稲田学生時代」「明治晩年から昭和戦前」「戦後から早稲田大学退職まで」の3つに大別されよう。本間は学生時代には島村瀧太郎(抱月)(1871-1918)や増田藤之助(1865-1942)の講義を受け、そこからワイルド研究への傾倒が始まったと考えてよいだろう。本稿では、特に明治時代の本間のワイルド研究に注目し、本間の残したワイルド研究が現在の日本のワイルド研究の原点となっていることを書誌の観点から明らかにしていきたい。

1 学生時代

代々上杉家に仕えた能楽師の家系に生まれた本間久雄は、坪内逍遙(1859-1935)にあこがれて、早稲田の門を叩くことになった。逍遙は明治29年(1896)から明治36年(1903)迄、早稲田中学校の教頭ののち校長を務めていた。『獄中記』(*De Profundis*)が出版された明治38年(1905)に、本間久雄は早稲田大学高等予科に入学、文芸協会が設立された明治39年(1906)には同大学文学科(英文科)に入学した。当時の早稲田大学は明治35年(1902)9月に東京専門学校より私立早稲田大学に昇格、改称したばかりであった。明治35年(1902)の英文学科の課程表の一部を見てみよう。(早稲田大学 435-436)

1 学年 英文学史 (16世紀以上)	片上伸
英文学 (論講 19世紀)	増田藤之助

英文学（講読及研究）	島村瀧太郎
2 学年 近世欧洲文芸研究	島村瀧太郎
英文学（論講 19 世紀）	増田藤之助
3 学年 英文学（講読及研究 19 世紀）	内ヶ崎作三郎
英文学（論講 19 世紀）	増田藤之助
美学	島村瀧太郎

もちろん、逍遙がシェイクスピアの講座を担当していたことは言うまでもない。抱月は明治35年(1902)3月には東京専門学校海外留学生としてロンドンへ出発し、ドイツやイタリアを経て、明治38年(1905)年9月に帰国した。10月から早稲田大学文学科で美学をはじめ、欧州文芸研究史などを講じた。片上伸(1884-1928)、内ヶ崎作三郎(1877-1947)はいづれも後年ワイルドについて論説を寄せている。本間が最も影響を受けたのは、留学から帰国したばかりの抱月の講義を受けたこと、増田からワイルドの講義を受けたことと思われる。本間は、1学年で「文学概論」、2学年で「欧州文芸史」（「近世欧洲文芸研究」）、3学年で「美学」及び「トルストイ研究」の講義を受けた。本間の卒業論文「近代批評上の二問題」は、シェイクスピアとトルストイ(Leo Tolstoy, 1828-1910)に関する論文で(英語青年 374)、逍遙からシェイクスピアを、抱月からトルストイを学んだことは明らかである。(a本間 176、b本間111) 本間の学生時代、明治39年(1906)9月から明治42年(1909)7月までの日本におけるワイルド関連研究の状況を整理してみよう。

明治 39 年	島村抱月 芸苑社講演会「英国の尚美主義」
明治 39 年 1 月	島村抱月「囚われたる文芸」(『早稲田文学』第1号)
明治 40 年 4 月	岩野泡鳴「自然主義的表象詩論」(『帝国文学』第13巻第4号)
明治 40 年 9 月	島村抱月「英国の尚美主義」(『明星』末歳第9号)
明治 40 年 4 月	平田秃木 新詩社社友大会講演「英国詩界の現状」
明治 40 年 5 月	平田秃木「英国詩界の現状」(『明星』末歳第5号)
明治 40 年 8 月	森鴎外「脚本『サロメ』の略筋」(『歌舞伎』第88号)
明治 40 年 10 月	厨川白村「近英詩人の時勢に対する関係を論ず」 (『帝国文学』第13～12月巻第10号～第12号)
明治 41 年 6 月	平田秃木「詩人オスカー・ワイルド」(『東京二六新聞』)

(6月24日～26日)

- 明治41年7月 是影生「オスカー・ワイルドの戯曲」(『帝国文学』第14巻第7号)
- 明治41年8月 安成貞雄「海外文壇消息」(『趣味』第3巻第12号)
- 明治41年9月 岩野泡鳴「詩人オスカーワイルド」(『太陽』第14巻～10月第12～13号)
- 明治41年10月 野口米次郎「ラスカー・ワイルドの復活」(『慶應義塾学報』第135号)
- 明治41年8月 小林愛雄「オスカー・ワイルド詞華」(『帝国文学』第14巻第8号)
- 明治42年3月 小林愛雄「悲劇『サロメ』」(『新小説』第14巻第3号)
- 明治42年3月 岩野泡鳴「私行上から見たオスカー・ワイルド」(『趣味』第4巻第3号)
- 明治42年4月 THE ACADEMY 舎生「オスカア・ワイルドの詩」(『スバル』第1巻第4号)
- 明治42年5月 厨川白村「オスカア・ワイルドの警句」(『帝国文学』第15巻第5号)
- 明治42年6月 野口米次郎「ラスカー、ワイルドの一面」(『太陽』第15巻第8号)
- 明治42年7月 西田幾多郎「神と世界」(『丁酉倫理講演集』第82集)

本間の学生時代はまさに日本にワイルドが紹介され始めた頃であり、抱月をはじめ、留学していた知識人達が次々と帰国し、大学の教壇に立ち始めたのもこの頃である。

本間が初めてワイルド論を発表したのは、早稲田大学在学中の明治42年(1909)3月の「人生も自然も芸術の模倣也」(『文章世界』第5巻第4号)である。明治39年(1906)の抱月の芸苑社講演会「英国の尚美主義」と比較することで、抱月一本間のワイルド観がはっきりして来るのではないだろうか。抱月が学生時代に美学に目覚め、さらに、留学後に発表した「英国の尚美主義」に注目して見る必要があるだろう。

2 島村抱月「英国の尚美主義」

抱月の美学への関心は明治24年(1891)10月に東京専門学校に入学し

て以降のことで、坪内逍遙と森鷗外(1862-1922)の没理想論争や大西祝(1864-1900)による影響があったようだ。(佐渡谷 189) 当時の日本の美学の様子を見てみると、明治22年(1889)にフェノロサ(Earnest Francisco Fenollosa, 1853-1908)が東京美術学校で美学・美術史の講義を始めている。明治24年(1891)には、増田藤之助が「社会主義下の人間の魂」(‘The Soul of Man under Socialism’, 1891)を抄訳した。東京専門学校では、同年に大西祝が論理、心理、美学、西洋哲学史の講義を担当し、翌年には小屋(大塚)保治(1868-1931)が美学、美術史を担当した。抱月には日本の美学の先駆者である大西祝や大塚保治などの講義を受ける機会があったと思われる。(佐渡谷 190) 明治24年(1891)には逍遙・鷗外の没理想論争によってハルトマン(Eduard von Hartmann, 1842-1906)を武器にしたう森鷗外の審美学(美学)が知られるようになった。抱月は明治27年(1894)に東京専門学校文学科を卒業した。卒業論文「覚の性質を概論して美覚の要状に及ぶ」は「審美的意識の性質を論ず」として改題され、『早稲田文学』に発表された。その後は東京専門学校文科講師となり、留学直前に『新美辞学』を発表した。

抱月は明治35年(1902)3月に東京専門学校留学生としてロンドンへ出発し、明治38年(1905)9月に帰国した。明治39年(1906)には『早稲田文学』を再刊した。再刊(第2次)の第1号には「囚はれたる文芸」を寄稿し、ワイルドへの言及はないもののラファエル前派などへの言及がある。同年、芸苑社講演会で「英国の尚美主義」と題した講演を行い、その内容は明治40年(1907)の『明星』(未歳第9号)に掲載された。抱月の論はまず尚美主義の定義、そこから尚美主義の実行者として、特にワイルドを紹介したのである。

是から述べますのは英国尚美主義の話であります、尚美主義はまた唯美主義、審美主義とも訳しまして、英語のイーッセチシズム Aestheticism がそれです。(島村 581)

島村抱月は尚美主義の起源をウォルター・ハミルトン(Walter Hamilton, 1844-1899)とマックス・ノルダウ(Max Nordau, 1849-1923)を土台にして、尚美主義を世紀末フランスのデカダンスからではなく、ラファエル前派に淵源する流れとして説明した。参考にしたのはハミルトンの

『英国唯美主義運動』(*Aestheticism Movement In England, 1882*)とノルダウの『退廃論』(*Entartung, 1893*; 英訳 *Degeneration, 1895*)が中心である。尚美主義の人としてウィリアム・モリス、スウィンバーン(*Algernon Charles Swinburne, 1837-1909*)、それにオスカー・ワイルドを取り上げ、ワイルドについては「尚美主義に於ける立場はむしろ実行者」(島村 588)であることとワイルドの尚美主義が紹介された。

オスカー、ワイルドの尚美主義に下した定義といふものを見るに、第一、芸術は芸術みづからを目的とする。随って第二には芸術は人生、自然、思想などいふものに頼ることなし。悪芸術は此等を目的とする所に生じる。總べて此等のものは一旦芸術の型に入れて始めて妙がある。第三に較もすれば人生は芸術が人生を模すると云ふが倒様である、人生が却て芸術を模するものである。(島村 588)

この定義は『架空の頹廢』(*The Decay of Lying, 1891*)に示されたワイルドの芸術観を紹介したものである。*The Decay of Lying*には次のような表現がある。

Art never expresses anything but itself. (Wilde 991)

The second doctrine is this. All bad art comes from returning to Life and Nature, and elevating them into ideals. (Wilde 991)

Third doctrine is that Life imitates Art far more than Art imitates Life. (Wilde 992)

抱月の「英国の尚美主義」では *The Decay of Lying* への直接言及はないが、これは明らかに *The Decay of Lying* を通して、ワイルドの芸術観を紹介したものである。この講演は文字通りイギリスの唯美主義を説明しているものであるが、その代表者としてワイルドを紹介することになり、結果的にワイルドの芸術観を *The Decay of Lying* を中心に紹介することになった。抱月が理解したこのワイルドの芸術観は、デカダン論に偏っていたこれまでの紹介と大きく違うものである。抱月は最後に尚美主義には注意すべき点として3つを上げている。「肉感的ということ」

「芸術はみづからの為と称して思想道德の凡てから独立しようとする事」と「情緒の強いのを主とし自己といふものを余りに明らに揚げ出さんとすること」の3点を取り上げ（島村 592）、特に重要な意味があるのは、第3点の「自己の登場」であると指摘した。（島村 594）この第3点の代表としてまさにオスカー・ワイルドの名前を挙げているのである。

3 本間久雄「人生も自然も芸術の模倣也」

本間久雄が初めてワイルドについて論じたのは、明治42年(1909)3月の『文章世界』（第5巻第4号）に掲載した「人生も自然も芸術の模倣也」である。

最近の我が文壇に持て囃されて居るオスカーワイルドと云ふ人は、矯激な行ひをした點に於ても奇抜な議論を吐いた點に於ても、其の生地たる英国に於ては勿論、恐らく大陸諸国に於ても近代作家中、殆んど独歩と云うてよからう。此の人は丁度、二三十年前の英国文壇を風靡した所謂唯美派中の随一人で、其の議論も亦、唯美派のオーソリテーと見られて居る。（c本間 63）

「人生も自然も芸術の模倣也」がオスカー・ワイルド論であることを、冒頭より明らかにしている。この論文でワイルドを「極端な芸術狂で、芸術あつて、始めて人生が存すると云ふ見解を取った人、所謂芸術至上主義者」（c本間 63）であると紹介した。抱月の「英国の尚美主義」では *The Decay of Lying* の内容を紹介しているものの、文中には *The Decay of Lying* への直接言及はない。しかし、本間は「此の人の論文『架空の頽廢』（*Decay of Lying*）は最も旗幟鮮明にこれらの理を説明したものである。」（c本間 63）と、抱月よりもさらに深く掘り下げている。ワイルドの芸術観を明らかにするために *The Decay of Lying* を紹介したのである。本間は「実際は人生こそ、自然こそ、却つて芸術を模倣すべきもので、夢幻は現実よりは一段上のものローマンス所謂リアリズムの作物よりは上等のものである」（c本間 64）と大意をまとめ、「芸術は人生の模倣ではないその改造である。従つて人生は却つて、其の改造された芸術を模倣すべきものである」（c本間 66）、ワイルドの芸術論を「芸術は人生の鏡と云はれて居るが実は人生こそ却つて芸術の鏡である。従つて人生は芸術の模倣である」（c本間 67）と紹介したのである。

實際、此の人の議論は、論として見るよりは一種の創作として見るべきものである。(c 本間 63)

ワイルドに対する本間のとらえ方は、「英國の近代はワイルドから始る」(吉田 7) という名言を残した吉田健一と同様に批評を創作としてとらえるワイルドの芸術観を高く評価したのである。

4 本間久雄「現實を離れんとする文芸」

明治42年(1909)12月の『早稲田文学』(第49号)の「現實を離れんとする文芸」では、「自然主義も唯美主義も共にロマンチズムを母として生れた」(d 本間 36・37)と論じ、自然主義はフランスから全ヨーロッパへ、唯美主義はイギリスの片隅で栄えたことなど文芸上の二様式について説明した。

ラファエル前派の文学者ロセテ、モーリス等を始めとして、オスカー、ワイルド、及び、つい先頃物故したスキャンバーン等は何れも其花形役者であった。(d 本間 26・27)

なかでも、ワイルドを代表として述べることになった。まず、*De Profundis*よりワイルドの人氣が復活したことを記し、なかでも‘*The Soul of Man under Socialism*’及び‘*The True of Function of Criticism*’の2編は最も注目すべき論文であることを指摘した。本間はこの論文で唯美主義の価値を考察するためにヨーロッパの文芸思潮からワイルドの唯美主義について論じ、フランスの高踏派、象徴主義・退廃派と「ワイルドの唯美主義は多くの点に於て、これらと相類似するもの」(d 本間 34)であると指摘したのである。形式を重んじること、芸術がそれ自体で存在の価値があること、道徳を芸術の下位に置くことは、高踏派と同じ要素が認められ、現実を斥けるところは象徴主義乃至退廃派と同じ要素を認めることができる。ワイルドの唯美主義は多種多様の文芸思潮と共通する点があることを指摘し、文芸上の唯美主義の価値問題を、近代文芸上の問題と結び付け、ヨーロッパの近代美学上の快樂説の遊戯本能説(*Play-impulse theory*)に注目した。本間久雄はワイルドの唯美主義が、明らかにこの遊戯本能説を土台としているとまとめたのである。明治43

年(1910)4月の『早稲田文学』(第53号)に掲載された「頹廢的傾向と自然主義の徹底意義」ではツルゲーネフ(Ivan Turgenev, 1818-1883)の『落魄の人』やゴロキー(Maxim Gorky, 1868-1936)に触れ、論旨はニヒリズムとデカダンはフランスやイギリスで栄えたというもので、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1890)が紹介されている。同年7月の『早稲田文学』(第56号)に掲載された「思ひより」では「黄色のシンフォニー」(*Symphony in Yellow*, 1889)を紹介すると共に観照生活論を論じた。

5 本間久雄「オスカア・ワイルド論」

本間のワイルド論が最もよくまとめられたのが、明治44年(1911)3月の『早稲田文学』(第64号)に掲載された「オスカア・ワイルド論」である。この論文は巻頭より35ページにわたるもので、その大きな特徴はワイルドが獄中生活により自己の芸術観を發展させたことを指摘したことである。

全体は13に分かれており、第1は「近代の文学者で、オスカー、ワイルド程、矯激な芸術観、奇抜な人生観を把持しえ居ったものはあるまい」(e本間1)で始まり、簡単なワイルドの生涯を紹介。第2では、ワイルドの詩集について触れ、

或る評家の云ふ如く、ホイッスラーが「色彩の音楽」“Colour-musician”ならば、ワイルドは確かに誰やらが云うたやうに「言葉の色彩家」“Verbal-colorist”と云うてよからう。(e本間5-6)

と、アートフィシアルな芸術の行方について触れている。第3では、アメリカの講演旅行、第4ではアメリカ講演旅行後のワイルドの交友関係に言及した。第5からは作品への言及で、『サロメ』が取り上げられた。第6では『ドリアン・グレイの肖像画』を取り上げ、

「ドリアン、グレイ」を通じて見たワイルドはやはり「サメロ」の作者である。重ねて云ふ。彼れの遊離的性格から遊離的なアーテフィシアルな作物な作物の外は決して生れないのである。(e本間16)

と、本間のこれまでの主張を繰り返し述べている。第7では、『架空の頽廃』と「芸術としての批評家」は注目に値すると述べ、『架空の頽廃』について論じている。

論題「架空の頽廃」の架空 (**Lying**)とはワイルド自らの意味するところに従うと、「美にして而も實際ならぬ物語を語ること」である。即ち所謂ロームンスと云ふ程の意味である。(e本間 17)

*The Decay of Lying*については「芸術は人生の模写でなくて、その改造である。従って人生は却つてその改造された芸術を模倣すべきである」(e本間 19)、「美を以て芸術の究竟目的となした」⁽³⁰⁾など、ワイルドの芸術観を指摘した。*De Profundis*については、

この書こそ最もよく彼れの唯美主義的生活の説明であり、弁護であり、又この難者に対する最も大膽なる挑戦状であるのである。即ちこの一篇は前に「架空の頽廃」などに見えた芸術上の唯美主義が、やがて確乎たる人生観上のものとなつたことを証明するものである。(e本間 28)

と評した。本間久雄はこの論文を「彼れの生涯とその芸術とは、確かに人生対芸術ということに就いての意味深き一つのシンボルではないか」(e本間 35)と結んでいる。*The Decay of Lying*を書いた時のワイルドは、芸術で人生を支配する、あるいは芸術を人生より優る地位に置こうとしていた。ワイルドは*De Profundis*の中で人生の転換を“the two great turning points of my life were when my father sent me to Oxford, and when society sent me to prison.” (Wilde 915)と示している。しかし、*De Profundis*により悲哀を通してワイルドの芸術観が人生観上のもの、すなわち、「芸術即人生、人生即芸術」へと発展したことを本間久雄は指摘したのである。「オスカア・ワイルド論」は、その後大正2年(1913)の『高台より』(春陽堂)に収録された。

本間久雄は明治44年(1911)10月に『早稲田文学』(第71号)に*De Profundis*を『獄中記』として初訳(省略版)し、翌年には新潮社より単行本として出版したが、これ以外にもいくつかの作品を翻訳している。一連の本間の功績は、ノルダウに代表されるワイルド観に支配されることなく、作品からワイルドの芸術観を理解したことである。

本間の「オスカア・ワイルド論」は明治44年(1911)に発表されたが、海外におけるこの前後のワイルド研究は以下の通りである。

Ingleby, Leonard Cresswell. *Oscar Wilde*. London: T. Werner Laurie, 1907.

Mason, Stuart. *Oscar Wilde: Art And Morality*. London: J. Jacobs, 1908.

Ransome, Arthur. *Oscar Wilde: A Critical Study*. London: Mr. Martin Secker, 1912.

Kenilworth, Walter Winston. *A Study of Oscar Wilde*. New York: R. F. Fenno & Company, 1912.

Hopkins, R. Thurston. *Oscar Wilde*. London: Lynwood & Co Ltd., 1913.

Jackson, Holbrook. *The Eighteen Nineties: A Review of Art and Ideas at the Close of the Nineteenth Century*. London: Grant Richard, 1913.

本間の「オスカア・ワイルド論」は世界のワイルド研究の流れをみても伝記研究からようやく作品論や芸術観への研究へと移行する時期に位置し、ホルブルック・ジャクソン(Holbrook Jackson, 1874-1948)以前に発表された点で大きな意味がある。

エピローグ

本間は明治以来、ワイルドを多く論じてきた。『早稲田文学』への発表はもとより、単行本としても大正2年(1913)2月の『高台より』(春陽堂)には明治44年(1911)3月に発表した「オスカア・ワイルド論」を収録し、大正5年(1916)6月の『近代文学之研究』(北文館)ではワイルドに関する論文が多く収録され、大正7年(1918)5月には『近代名著評釈』(春陽堂)を出版し、大正9年(1920)には矢口達編『ワイルド全集』(第1巻、天佑社)の冒頭論文が本間久雄「オスカア・ワイルドの生涯」となっている。「オスカア・ワイルド論」(1911)、「ワイルド伝中の一つの謎」(1915)、「オスカア・ワイルドの生涯」(1920)への変遷は、本間のワイルド研究の関心の方向を指し示すものである。本間の関心は獄中前、獄中生活、獄中後のワイルドのうち、獄中生活と獄中後へ向けられてお

り、ワイルドの芸術観の推移を集大成した。

本間のワイルド研究は島村抱月「英国の尚美主義」(1906, 1907)に大きな影響を受け、「人生も自然も芸術の模倣也」(1909)や「現實を離れんとする文芸」(1909)を経て、「オスカア・ワイルド論」(1911)の発表へと至った。島村抱月が *The Decay of Lying* から見たワイルド観を中心に展開させたのに対して、本間は *The Decay of Lying* から *De Profundis* へのワイルドの人生観上の変遷と共にワイルド観を発展させたことになる。島村は文芸協会解散後は芸術座への活動へと入っていくことになるが、本間のワイルド研究はさらに深められていくのである。

引証資料

早稲田大学大学史編集所『稿本早稲田大学百年史』第2巻上、早稲田大学出版部、1976年3月。

「本間久雄氏逝去」『英語青年』第127巻第5号、研究社、1981年8月。

a 本間久雄『生活の芸術化』三徳社、1920年6月。

b 本間久雄「オスカア・ワイルドと日本」『文学』第2巻、1934年1月。

佐渡谷重信『抱月島村瀧太郎論』明治書院、1980年10月。

島村瀧太郎「英国の尚美主義」『近代文藝之研究』早稲田文学出版部、1909年6月。

Wilde, Oscar. *The Complete Works of Oscar Wilde*. London: Collins, 1990.

c 本間久雄「人生も自然も芸術の模倣也」『文章世界』第5巻第4号、1909年3月。

吉田健一『英國の近代文学』垂水書房、1959年11月。

d 本間久雄「現實を離れんとする文芸」『早稲田文学』第49号、1909年12月。

e 本間久雄「オスカア・ワイルド論」『早稲田文学』第64号、1911年3月。